

第2章. 人間と世界とのつながり

第1章に書いたことの一節を以下に繰り返す。

私たちを取り巻いているのは現象だ。多くの現象群で構成される環境の中で私たちは人間は生きている。そして、人間はそれらの現象を知覚して世界を認識する。世界には様々な物体が存在しているが、物体が認識されるのは何らかの現象を通してである。私たちが生きる世界は現象群から成っている。

世界は私たちがいなくても存在するだろうし、人類の存在とは関係なしに存在するだろう。しかし、私たちが生きる世界や人類が生きる世界とはどういうものだろうかと考えてみると、どうもそういうものではなさそうである。

私たちが生きる世界とは、私たちがその中に在って、そこで生きながら感じ取るものであり、尚且つ私たちが働きかけ、それを受けて変化するもの、と受け止めるのが適切なようである。

世界をこのように受け止めると、本章の冒頭に繰り返した一節が現実味を増してくる。私たちが生きながら感じ取るとは、自分が生きている世界から何かを感じ取ることだ。それは個人的レベルでのこともあれば、全人類的レベルでのこともある。

感じること、あるいは感じ取るとは、私たちの知覚を通してなされる。そして、知覚は何を感じるか、あるいは感じ取るかといえ、それは現象である。私たちが生きる世界は、現象を通して人間とつながっているのだ。

同時に、私たちが生きる世界は私たちが働き掛ける対象でもある。人間はこの世界に働き掛ける。その結果、世界は変化する。その変化は現象となって現れる。この現象が人間の知覚により感じ取られる。

人間が働き掛ける対象には、生命を持つものもあれば持たないものもある。働き掛けに対して、生命を持つものはその生命現象としての反応を返してくる。生命を持たないものは、働き掛けに対して生命現象としての反応はしないものの、何らかの変化を起こす。即ち、人間の働き掛けに反応するのは生命を持つものだけではないということだ。

人間が関わらないことに関しても、働き掛けと反応の作用は起こっている。風が吹いたり雨が降ったりすることが大地に変化をもたらす。微生物の働きで倒木が大地に帰る。こうした事例に限らず、私たちの生きる世界に存在する万物は、感じ合い、働き掛け合い、反応し合っていると言える。

私たちの生きる世界とは以上のようなものである。そしてこの世界は、あるものを介して人間とつながっている。そのつなぎの役割を担っているのが現象なのである。そこで、こうした役割を担っている現象についてもう少し踏み込んで考えてみる。

現象とはこういうものだと言えようとする時、浮かんでくるものが色々ある。人間が知覚したり認識したりできるものとして考えると、次のようなものだ。

- ・ 自然の中に現れるもの
- ・ 社会の中で事実として認められるもの
- ・ 人間の感覚に刺激を与えて知覚されるもの
- ・ 存在すると信じられているもの
- ・ 起こっていると信じられているもの
- ・ 人間が言葉で表現するもの
- ・ 人間が動作や表情で表現するもの
- ・ その他 諸々

こうしたもののの中には、科学的に証明されるものもあれば、そうでないものもある。現実には発生や存在が確認されるものもあれば、そうでないものもある。人間が生きる世界とは、こうした多様な現象から成っている。それは自然から成る世界や、科学の成果が構成する世界、そして思想家や文学者が描き出す世界、といったものよりも遥かに広く大きいのである。

この世界は、自然界や社会の中で現実に捉えられる世界だけではなく、一人一人の人間の内部に現れる心的世界をも包含している。一人の人間が、「こんな風に感じた」とか「こんなことが心に浮かんできた」と発言すれば、それは一つの現象として受け止めることができる。即ち、人間の心の状態も、発する言葉や動作や表情を通して、現象として知覚される。

即ち、現象として捉えることができるものには、自然界に起こっていること、社会の中で起こっていること、人間の心の中で起こっていること、といったものが含まれている。自然現象、社会現象、心理現象と言い換えてもよい。

では、心霊現象はどうだろうか。これも、人間の発する言葉や動作や表情を通して知覚されるのであれば、現象として受け止めなければならない。現象とは事実だけではない。虚言であっても、それが知覚されるのであれば現象として受け止めなければならないのである。後になって知覚された現象によりそれが虚言だと判明すれば、「誰某が虚言を吐いた」という事実が現象として受け止められることになる。

人間と世界とをつなぐ役割を担っている現象に、人間はどのように対処するのが

良いのだろうか。また、どのような姿勢で対処するのが良いのだろうか。現象は一つ一つ知覚されるが、一つ一つ知覚された複数の現象は現象群を構成する。

現象群は何らかの意味を表現している。現象群をどのように受け止めるかによって、その表現する意味を見い出せるか否かが左右されたり、そこに見い出される意味が違ったものになったりする。

現象群の受け止め方の代表的なものの一つは、現象間のつながりを因果律で捉えにいく因果律思考である。即ち、Aという事柄が原因となってBという事柄が起こった、という論理を積み重ねて現象群が表現している意味を見い出そうとするものだ。この際、因果律で受け止めることができない現象は、無関係、あるいは雑音（ノイズ）として捨てられる。

こうしたやり方で見出された意味は、関わっている現象の全てが因果律でつながっているゆえに、きわめて堅固なものである。自然科学の世界で確立されている原理や法則は、この類のものである。

厳格な因果律思考を幾分緩めたものが、相関関係から意味を見い出そうとする相関思考である。観察データや実験データを整理して、複数の変数の間に何らかの関係を見い出そうとする際によく使われる回帰曲線などがその典型的な例だ。

この方法では、因果関係には注目せずに変数が変動する関係だけに注目する。多様な回帰曲線を想定できる中で、最もそれらしいと思える曲線を想定して、そこに意味を見い出そうとする。この際にも、想定された曲線から外れていると判断されるデータは無関係、あるいはノイズとして排除される。

因果律思考も相関思考も、ある種の現象を無関係、あるいはノイズとして排除して意味を見い出そうとする。これがこの思考法の弱点だ。実際には、捨てられたり排除されたりした現象が、きわめて重要な意味を持つことが結構多いからだ。

前章に、フロイトやユングが精神に異常を来した人間を研究して、人間の精神や心の在り方の真理に迫ったことを紹介した。こうした取り組みが示していることは、一般的には異常だとか考慮外だとか言われて、捨てられたり排除されたりする現象にも真理への入口が隠れていることを示していると言えよう。

因果律思考や相関思考は、現象群が表現する意味を見い出す上でたいへん有力な方法だが、それだけでは真理を見逃す恐れがある。こうしたことに気付き、真理に迫るために取るべき姿勢を提示したのが、現象学だと受け止めている。現象学はフッサールが創始し、ハイデガー、メルロ＝ポンティらを経て現在にまで至っている。

現象学からの学びは多くのことを教えてくれる。「現象群が表現する意味を見出す」という観点から、次のようなことが見えてくる。

- ・ これまでに身に付いた知識と思考の枠組みを一旦脇に置いて、現象そのものに直接向き合うこと、常に事象そのものに密着しようとする姿勢を保つこと。
- ・ 一切の理論的関心から離れ、一切の付きまとう前提から自由になって認識体験を純粹に記述すること。
- ・ 習慣的にその存在が仮定されている世界の存在についての確信を一時保留し、意識に直接与えられる体験から世界というものの意味の形成を見きわめようとする姿勢を持つこと。

こうした姿勢を通して、自然を客体化して見る時に現れる自然主義的世界の存在への確信が一時保留され、普段反省されることもない素朴な日常的経験の世界、すなわち生活世界、あるいは客体化された世界の手前にある生きられる世界が立ち現れてくる。

こうして、原理的には知覚不可能であり、それ自体の存在に置いては経験されることのない理論的構築物である客体的世界から、直接直感に与えられる生活世界、すなわち経験可能な世界へ立ち戻ることができる。

- ・ 認識作用に先立つ知覚経験においても意味は産出される。この意味は、意味付与という能動的なものではなく、意味発生というべき受動的なものである。すなわち、生活世界こそあらゆる意味発生の基盤となっている。そして、知覚経験の主体は空間的、時間的に定位された意識、すなわち身体なのだ。
- ・ 合理性があるということは、様々な投影画像が切り合わされ、様々な知覚が相互に確認し合って、そこに一つの意味が立ち現れてくるということである。
- ・ 生きられる世界こそが科学による客体的世界の構成の出発点であり、不断の足場でもある。

現象学の提示している姿勢は、人間と世界とのつながりの基本的な在り方を示している。こうしたことを基盤に置いて、物事の本質とか真理とか呼ばれるものがどういうものであるかを解き明かすことができそうである。また、世界の細分化や分析を通して得られた法則の枠組みに拘束されることなく、全体を相として、相の変化として捉える道が開けそうである。